

安田峰俊

(やすだみねとし)

略歴

一九八二年、滋賀県生まれ。中国ルポライター。立命館大学人文科学研究所客員研究員。多摩大学経営情報学部元講師。立命館大学文学部東洋史学専攻在学中に中国広東省深圳市に留学し、その後、に広島大学大学院文学研究科博士前期課程修了。当時の専門は中国近現代史。二〇一〇年、中国のウェブ事情を扱った『中国人の本音』（講談社）でデビュー。その後は中華圏での現地ルポを中心に雑誌・ウェブ媒体等で執筆。他の著書に『和僑』『境界の民』（KADOKAWA）、『さいはての中国』（小学館）など。



〈受賞のことは〉

中国との縁は、高校三年生だった二〇〇〇年二月に福建省に旅行してからのことです。それから中国語を学び、大学と大学院で中国史を専攻して——と、気づけば人生のちょうど半分、かの国と付き合ってきました。私の「中国人生」は、現地において「八九六四」と六四天安門事件の記憶が風化しはじめ、急激な経済発展が進んだ時期と重なります。

中国共産党による統治体制の改革を凍結させた現在の中国は、数多くの社会矛盾を抱えてはいますが、反面で驚くほど強くて豊かな国になってしまいました。そんな中国を作り上げた契機が八九六四です。いま、過去の悲劇を知る中国人が事件をどう見ているのか、事件は歴史のなかでいかなる意味があったかという問いは、中国ルポライターとなった自分がかの国への渡航を重ねるなかでどんどん膨れ上がりました。もはやこの疑問の答えを調べずにはおれないと、取材をおこなった結果が本書です。

現在、世界中で民主主義への信頼が揺らいでいます。過去にはかなく散った民主化運動への複雑な思いを持ち続けつつも、現代の中国社会で生きている人たちの姿から、私たち日本人は自国の民主主義をどう考えればいいのか。本書はそんな思いで書いた作品です。